

第 18 回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要

I. 開催日時および場所

日時：2019 年 5 月 24 日（金）15:00～17:00

場所：福島テルサ小会議室（しのぶ）（福島市上町 4 番 25 号）

II. 委員

別紙名簿の通り

III. 資料

- 議事次第・席次表
- 資料 1 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（2019/5/24 版）
- 資料 2 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第 17 回）議事概要
- 資料 3 2019 年度ビジョン推進体制・取組一覧
- 資料 4 2019 年度ビジョン実施計画
- 資料 5 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進計画書第二期（案）
- 資料 6 双葉郡の教育のこれまでとこれから
- 資料 7 平成 30 年度三春校アーカイブプロジェクト活動報告書
- 資料 8 教えない教育 プロフェッショナル・イン・スクール 2018
- 資料 9 魅力ある広野の教育
- 資料 10 ふたば未来学園中学校・高等学校進捗報告資料

IV. 議事内容

1. 開会

1) 開会挨拶（石井賢一 富岡町教育長）【資料 6】

- 5 月 10 日に復興庁と文科省を訪問。渡辺復興大臣、浮島副大臣に話を聞いていただいた。国、県からの支援を受けながら 8 町村で頑張ってきたが、子どもたちの帰還状況は芳しいものではない。ただ、教育あつての町、村。教育の火を絶やさないで頑張っていくことも大事な取組の一つ

2) 自己紹介

2. 前回（第 17 回）議事概要【資料 2】確認

- （全会）承認

3. 議事

1) 今年度の各取組実施状況について【資料 3】【資料 4】

- 教員による実行委員体制を継続。今年度より新たにふたば未来学園中学校の教員が中高交流会実行委員会とふたば生徒会連合担当委員会に参画する

- 5月20日は福島大学の宗形潤子教授によるふるさと創造学教員研修会を実施。視点や考え方を共有することで先生方の意識もさらに高まったようだ
- 2) 福島県立ふたば未来学園中学校・高校活動報告【資料10】
- 知や論理をつかむ力、互いの違いを乗り越える力を育成するため、併設中学校カリキュラムでは、地域課題探求、演劇・表現系探究、哲学・スキル系探究を3つの学習の柱として据えた
 - 高校の卒業生に「このような探究活動が自分自身の将来にどうつながったか」というアンケートをとったところ、「社会とどうやって関わっていきたいかを見いだすことにつながった」、「自分の価値観を変えることにつながった」と答えた生徒が8割を超えた。高校の探究の授業が生徒の生き方に大きくつながったことは非常に大きな成果。これを中学校からやっていく
- 3) 各町村教育委員会の現状と課題
- (浪江町) 4月時点で住人がようやく1,000人を超えた。現在、小中全校あわせて児童生徒が18名と極めて少ないが、ようやく下げ止まったように感じる。浪江の小中学校の教育は途切れてしまうのではないかと危機感を抱いていたが、つながった大きな理由の一つは教員の力。その状況の中で何をやるかを見定め、周りの協力を得ながら必要な教育をつなげてくれることができた。子どもたちの教育は、周りの方、避難先の地域や全国の方々のつながりの中で形作られていくもの。少人数をデメリットにしない工夫が必要であり、他町村と連携するビジョンの取組を活用していきたい。また、なみえ創成型のコミュニティスクールを今後、きちんとした形にしていく
 - (葛尾村) 帰村3年目。5月1日現在、全人口1,400人の26%、320名が帰村。中学校3年生が4名、幼稚園から中学校2年生までだいたい1名、学年によって2名という状況。村も学校も少人数で急に増えることは考えられないが、とにかく今できることは何かを考え、人々の交流やふれあいを大切にした活動を進めている。ICTを活用した遠隔授業、直接近隣の学校へ出かけていっての合同授業、合同の村民運動会、ふれ愛給食会、若い世代を対象にしたカルチャースクール等に取り組んでおり、子どもからお年寄りまで希望を持って、生きがいを持って、お互い助け合い、ふれあって、学び合っていく、そんな教育を進めていきたい
 - (双葉町) 町に戻っての学校再開はまだまだこれからで、1、2年後とはいかないと考えている。2020年に駅を中心とした地域が解除になれば少し先に進むだろう。区域外就学生も多くなってきたが、特別支援が必要な子どもも多くなってきたことが課題の一つ。学校で進めているふるさと学習では、ICTを活用してバーチャルに双葉町の様子を見たりしており、何か一つでも町に興味を持ってくれて、それが今後のきっかけになればよい。双葉町にはまだまだこれから一つ一つやっていかななくてはいけない部分がたくさんある。本協議会でも情報を共有しながら、指導いただきながら進めていきたい
 - (大熊町) 今年度は幼稚園3名、小学校は大野小・熊町を合わせて12名、中学校3名、

合計 18 名でのスタート。昨年度と比べると児童生徒数は 16 減。地域の方に協力をいただいているが、人数が少ないので学び合い等には大きな課題がある。スクールカウンセラー、スクールワーカーと協力・連携しながら、一人一人に合った教育ができるよう進めている。2022 年に大熊町での学校再開を目指しており、まだ先が見えない状態だが、一歩踏み出したところ。まだまだ課題が多いが、一つ一つ進めていきたい

- (川内村) 昨年度 3 月に教育基本計画を策定。今年度はそれに基づき、9 年間の教育課程を編成していく予定。今後は 5 つのワーキンググループを設置し、それぞれの課題ごとに検討。今年度中には大方決め、1 年間詰めていく。4 月には学校運営協議会を発足。2 年間施行し、開校時には整った姿でコミュニティスクールを始めたい。地域学校協働本部の活動拠点として、コミュニティスペースを設ける。その検討、運用についてが今年度の課題
- (檜葉町) 6,908 名の住民登録で、3,678 名が町内居住、53%の居住率。学校は再開して 3 年目。4 月 1 日現在、こども園 85 名、小学校 82 名、中学校 27 名。就学率は中学校 20%、小学校 33%、こども園の 3 歳から 5 歳 39%。年齢が下がるにつれて就学率が高くなっている。学校再開時は不安があったかと思うが、国、県の手厚い支援で生活環境と教育環境の整備もされ、保護者、地域の方々に徐々に理解されつつある。組織した検討委員会にて、小学校の統合や学校運営協議会も含め、全体的にもんで、今後、検討結果をまとめる。また、地域の方に学校の指導内容を見てもらいながら意見をいただくアドバイザー制度を設けた。将来的に学校運営協議会につなげていきたい。郡の全体的な傾向だが、特別支援が必要な子どもが少し多い傾向。継続的な支援を引き続きお願いしたい
- (広野町) 【資料 9】 4 月末時点で帰還者 4,194 名、帰還率は 87.2%。小中学校の児童・生徒数は学齢簿 282 名中 237 名で 84%就学率だが、震災前の児童・生徒数 541 名を比べると少子化が進んでいる。「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、学校と地域の連携、協働を進めながら魅力ある広野の教育を浸透するため、学校評議員制度を再開し、冊子で保護者の方に町立の学校の魅力を伝えている。同じ町内にあるふたば未来学園中学校は好印象で、違いを凶っていかないと大変な状況。なんとか残った生徒をふたば未来のレベルに上げるよう頑張っていきたいが、同じ町内の中学校同士、交流も凶っていきたい。半径 2km 内の徒歩通学を今年から完全実施。中学校の部活動の存続が課題。調整が難しい
- (富岡町) 【資料 7】 やっと居住者が 1000 人を超えた。高齢者の居住率が低下し、20 代から 40 代の居住者が増えてきているが、単身赴任の男性が非常に多い。今後も子どもの数が急激に増えることはないが、学校では子ども達が元気に活動できるよう進めている。加配教員のおかげで充実した教育活動ができている。以前の復興庁の事業での成果を生かしながら、ビデオ会議システムを富岡校、三春校で 2 セットずつ入れて活動している。現状、子どもの数よりも教職員の数が多いので、うまく活用したい。教えたくて教えたくて仕方がない先生が一生懸命なので、「待てる」指導も必要かと思い、先生方の研修を進めている。なお、三春校は令和 4 年に閉校となる

(委員質問)

- ふたば未来は 2 回卒業生を出したが、復興、郡、県にどう貢献していけると考えるか
→ ふたば未来は高校で社会との接点があるため、そのような観点もあるが、8 町村の

義務教育の集大成でもある。全体として、社会、地域復興の接点を具体的にどう展開するのか問われてくる場面もある。大学も同じ責任を担っている

- 子どもの数が少ないことをどうメリットとしていくかを考えると、自分のところだけでは解決しない問題がどんどん増えていく。どこに頼るかとなると、隣の町村もあるが、一番頼りやすいのは縦。学校としては高校、高校は大学。このビジョンに書かれている小中高大の連携は今後もっと高い重要性を示していくのではないか。未来学園に対する期待は高い。町の中に高校があることには非常に意味がある。循環し、それが大学につながっていく仕組みがなんとかできないか
- 郡内すべての先生が一堂に会して集まり、お互いにふるさと創造学の取組を理論化、普遍化し、全国に発信していきたい。いつか、全国の人たちが視察にくるような大研究集会を双葉郡で開くことができればよい。我々が取組を理論化し、効果をはかりながら、どういう教育をしていけば地域の復興につながっていったのかを共有していければよい
- アクティブラーニングと、それを展開するシステムを各町村、8町村全体、8町村以外とも連携して組み立てている。きちんと整理しながら社会的発信をしていく価値があるのでは。双葉郡の強みや復興への責任。そういうことを考えられるような8年目、9年目を重ねていきたい。私見だが、大学が果たさなければならない役割もあると感じる。ふるさと創造学という実践的な学習を積み重ねてきた福島の遺産を、大学がきちんとキャッチできるような仕組みを作り始めている。幼小中高大の連携をどのように具体化していくのかも重要な視点

4) 第二期推進計画書について

- 前回の協議会の内容を踏まえ、3. 1. 2の「ふるさと創造学の推進」の下に、「双葉郡内の小中学校の教職員が、ふるさと創造学を含む双葉郡教育復興ビジョンの目的や理念を継承、共有し、その実現を目指した各校の教育実践を共有するとともに、理念をさらに高め、実践を体系化、全国へ発信、波及させる場を設ける。具体的な内容は年度ごとに検討する」を追記した。その他は語句の訂正等。これで二期案として提案したい
- 事前の検討を踏まえた内容として、承認いただきたい
 - (全会) 承認

5) その他

- (1) 委員からの情報共有
- (2) 今後の協議会開催予定
 - 次回は1月以降開催の予定

4. 閉会

以上